
二人の優等生

ぽぽすみす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の優等生

【Nコード】

N7925E

【作者名】

ぽぼすみす

【あらすじ】

方やエリート街道を進むかつての秀才少女、方やその階段を踏み外したかつての院政少年、二人の優等生の「ホントの気持ち」とはいかに！

それは、単なるきっかけ。

「アンタ東野郁美さんで知ってる？仲良かったらしいね。

覚えてる？って聞くように頼まれたんだけどどうですか？？」

・
・
・
・
・

やっぱりか！

なんたる偶然！

なんたる奇跡！

なんなんたるたる！！

二浪生活にうなだれてた俺には十分すぎるネタの到来。

「きたあああああ！！くそつ、やはり東大いったのか！！！！く
おおおおおおお！！！！なんてこったい！！！！」

薄々そうなるだろうなあとは思っていた。

いや、小学校の誰もがそう思っていただろう。

成績優秀。

スポーツもソコソコ。

容姿も端麗。

ピアノもできる。

おまけに地主の娘。

簡単に言ってしまえば、お嬢様。

親ですら、

「あんた郁美ちゃんには何やっても勝てないからねえ」

と俺をブツた切る。

ごもつとも、7年たった今のこの現状が・・・ね。

「あの有名女子校から現役ばいよ。すげーよなあ。君が数1でミスったこととか話しちゃった（笑）付き合ってたとか??」

確かに、今の歳だったならアタックしたかもしれない。

が、当時の小学校にそんなませた空気はなく、至って平和に支配されていた。

「現役ですか、さすがあ（笑）秀才少女いまだ健在かよ。他の私立組は皆そのまま上がっちゃったからさ、俺一人だけかと思って、今頃頃どうしてるのかな?と気に掛けていたのさ。」

俺の天敵、よく言えばライバル?みたいな。その出来の良さに憧れてたっていうの?彼女は僕より全然キレますからね、でーんでーん上です上。

で、いかにしてそんな接点が生まれたんだ?」

いや、今となってはそれが好意だったのか、他の何だったのかわからない。

ぶっちゃけ好きだったんだろう?

そう、共学校に進んでたらマドンナになるくらい完璧。

おしとやかで、控え目。

完璧。

よく言うでしょ、八方美人って。

彼女は七方美人だった。

見た目以上に彼女はキレる。

捻くれ者と言われる俺よりも。

「2年生と一緒に合宿して、ウチのクラスの担当がたまたま東野さんのいるクラスだった。んでコンパの時高校の話になってウチの高校の名前を出したら急に

「藤原くんって知ってる？」と聞かれたわけ。つまり向こうは君の進学先を知ってたわけだよ。これは仲を疑わざるをえないではないか。」

小3の時、皆の日記を一冊の文集にまとめた。

その時は全く眼中になく今まで気付かなかったが、その中で東野はこう書いていた。

「私は本音で話し合える友達がない」

どこにそんなことを書く小学三年生がいるだろうか。

少したじろいじまった。

七方美人、残りの俺に向けられた一方毒舌。

「死んじゃえ」

昼休み、すれ違った不意に、ボソツと。

「いや、何でもないのでよ。冗談冗談！」

俺はその微笑みが冗談に取れなかった。

「オリエンテーションで当たるとかどんだだけだよ（爆）」

俺の進学先は、塾の折り込みチラシで顔つきでこちら辺一体に何度かまかれたから、たぶんほとんど知ってる（笑）

ちなみにこちら一体は戦後の農地改革で東野家が手放した土地柄なんよ。な、勝てる気がしないだろ？（笑）

そついやトイレで男女戦争もやったな（笑）

男は変わらないけど女はかなり変わるらしいからな、何か変わってた？ってお前にに振ってもわかんねーよな（笑）」

もはやセンセーショナルでは済まされない衝撃を受けたからには、意識しないわけにはいかない。

それでも行事を裏から牛耳・・・というか男子代表だった。

ま、言わなくてもわかるでしょ、勿論彼女は女子代表。

たまには表に立とうと実行委員長に立候補するなり、すぐに譲られる。

その時から、何かと手のひらで転がされる感に納得がいかなかった。

そう、何か悔しかった。

「んな事まで覚えてるとは好きだったんじゃないの？笑」

「好きっつーかさっき言ったように憧れだな。追いつきたいが追いつけない、人徳でも頭でも勝てない、そんな領域の人。」

唯一、担任への媚びは俺が勝っていた。

裏から色々出来たのも将に担任のご贔屓のおかげ。

一人だけ可愛がられ過ぎて、皆の恨みをかっていたとの噂があったり・・・

・・・だから三年前の同窓会に呼ばれなかったのか！？

まさか（笑）

「なる。そうゆうヒトって確かに東大にいるよなあ。

変わる前は良く知らんけど、お姫様ばくて、さすがお嬢様校って感じだから、そんな悪ガキで毒舌言いそうに無いイイヒトだし。てかやわらかい雰囲気で女の子っぽいし、ぶっちゃけかわいかったからお前にはやるなと思ってたわけだが（笑）」

俺も最初はそうだった。

「生涯バカにされそうなのでやっぱり今年も東大にします（笑）」

お姫様あ！？しかもお前がぽぽなレベルですか（笑）

そして悪ガキではない（笑）俺もアイツも正真正銘の優等生、いや俺はなんちゃって優等生だけど。

君が彼女を手で転がせたら俺は感動して尊敬するぜ、マジで。大丈夫、弱点なら俺が教えてあげるから（笑）」

俺は・・・

「なんつーか癒しを持ってるね。ぽぽぽ（？）ではないですけど（笑）守ってあげたい感じ？（キモいですね）」

明日会うかもだから良かったらメアド聞いてあげようか？（笑）」

お姫様でなく悪女にしか・・・

「癒しなんかとんでもねえ！！緊張感ならわかるけど。怖えーぜ、二面性っぷりは。」

「キモいんだけど。アンタ二浪とか死んじゃえば？」とかリアルに言われそうで恐ろしい。触らぬ神にたたりなし！ーじゃん、お前が聞けば。精一杯援護してやるよ。うん、それがやりたい、食らわずに一方的に攻撃できるからな、俺は（笑）」

仲人で色々暴露できたらもう全部の借り返せるね（笑）

「オレにジョーカー引かせるな（笑）ぶっちゃけメアドはもう知っ

てるけどね。君が欲しいなら送りますがいらないうら、ねえ（笑）
「本音で話せる友達」ってヤツになってやりやいいじゃん。うりうり。

てか東野さんが

「藤原クンと連絡とりたいの・・・」って言ったら教えていいべ？
なに、よろこんで、だって？？よしわかった（笑）」

はい？そりゃーあり得無い話だぜ？

「確かに向こうが来るなら何か弱点掴んだようで嬉しいけど、俺からまず無いよ（笑）でもよく考えたら自分より頭がキレル点はタイブか？完璧なツンデレきゃらだったたり？って何考えてんだ俺は（笑）」

ババは引いてナンボじゃ！つーか彼女から俺の弱点を聞き出そうとかそういう事はいけませんぜ、お兄さん（笑）

俺には本音で話せる君がいるから大丈夫だ。おつ、決まったんじゃね？（笑）

しかも四年生の日記に

「本音で話せる友達が出来ました」ってあるんだな、はは。

つーかキサマはそんなに俺を生け贄に捧げたいのか！？

ヤツはそんな可愛い台詞が言えるほど・・・って言えないわけないか、ともかく奴に騙されてるんだお前は！！目を覚ませ！（笑）」

んー、やっぱりツンデレ以前に斬られて再起不能にされるよな・・・

「おれはやまもとをいけにえにささげてとうの（Lv・∞）をしようかんした！

とうのはレイズをとえた！

やまもとはふっかつした！

・・・となるから大丈夫。お前は一度殺されるかもしれんが、生き返らせてくれるはずだ。再度殺されるかもしれんがな（笑

良く分からないお前の秘密を探るまたとないチャンスを逃すわけにはいかん。やっぱ教えることにしよう（＾．＾）bみなまで言うな、そなたの本心は分かっている！笑）

間違いなくわかつたらん！

確かにぶっちゃければ、気持ちは五分五分。

彼女が出来れば少しはメリハリのある生活になるかもだし、たぶん本心はそれを望んでるだろう。

だが・・・それはやはりあの悪女面を見てなかったら、の話。

でも、久々に旧友に会える好奇心はあるかも。

・・・ってよく考えたらあんま喋った記憶無いかも（笑）

「わからんやつちゃな！仕方がないから教えてやろう・・・

それは中一の冬・・・

それは中一の冬・・・

時は二月十四日――

まさにその時歴史は動いた。

何にも気にしてないフリをして、実はドキドキしてる・・・まあ無
いと言えば嘘になるが、世の一般男子より特別関心はなかった。

いや、むしろ

「菓子屋の策謀に踊らされやがってこのばあああああああかが――」

ってな感じ。

好きな子何ていなかったし、

「付き合う」ってというのがイマイチ分かってなかった。

テニス部の練習を終え、教室に戻り、当然ながら教室にいる女子何かに目もくれず、友達と帰ろうとしていた。

「たんまあー、ちょっと来てえ」

チツ、何だよ帰るときになって――！

「ということだ、藤原。ちょっと待っててくれ。」

あーそうですか、よかったですねー、好きなだけ踊われなすってくださいな。

が、すぐにまた教室から現れた。

不思議な笑みを浮かべて。

「で、どうだったんだ？」

「・・・ニヒヒヒヒ」

何だコイツ。

嬉しいのか？

だから抱きつきたいけど部活後でムサイからとりあえず二本の手で俺の腕を握ってみたのか！？

天使のような口溶けと、悪魔のような甘さ・・・

お前はそんな高級品を賜ったのか！

それなら俺も欲しい！！

それを俺によこせ！！

というのは妄想、目前には今まさに彼に捕えられそうな現実がある。

本能的にそれはかわすもの。

それでも彼は笑いながら迫ってくる。

本能的にそれは逃げるもの。

気が付いたら下駄箱にいた。

が、なぜか彼はやってこない。

実はあいつシャイで恥ずかしがって俺にちよっかい出したただだったのか・・・？

・・・迎えに行つてやるか。

これがその時。

恐る恐る廊下を逆走し教室が見える位置まで来た時、そのドアは勢い良く開いた。

「皆！アイツを捕まえる！！」

は？

な、何なんじゃキサマら！！

やっぱり俺か！？

というかこれはヤバイ気がする！！

6、7人が勢い良く向かってくる様は、身の危険を感じるに十分だった。

ということで、今度こそ帰るとい意志と共に再び下駄箱まで逆走。

が！

そこには俺の靴を持って走り出していた見ず知らずの男子約一名！！

あれ、あの人陸上部じゃなかったっけ？

って何で俺の靴を持っていくんだ！

まてええええええい！！

彼を追い掛けようとしたところ、昇降口脇に潜んでいた別動隊に奇襲をかけられ、校舎裏で御用。

「うるるらあああああああ！！！！離せボケエ！！！！」

「いいからいいから！皆コイツを担いで！！」

「いや、良くねえから逃げてんだろーが！！っていつかそれ俺の力バン！！」

くそっ、おまえら俺を裏切る気が・・・

逃亡したせいか、10人ぐらいに仰向けに担がれ両手足を掴まれた。完璧な五体不満足。

押しても引いてもびくともしないため、遂に観念・・・

したように見せかけ！！

何を血迷ったか、外から教室に投げ込まれた瞬間に反対側のロッカーに向かって激ダッシュ！！！！

はい登る！！！！

上にある長細い換気用の小さな木枠の窓を擦り抜ける！！！！

で、飛び降りる！！！！

はい、檻からの脱出成功です。

ふう・・・

で、いったい俺が何をしたと言っただ？

手がかりといえば、皆がニマニマしていること。

ん？まさか・・・

でも、思い当たる人物がない。

確かに女子とも話はするけど、かといって好意を持たれるような行為をした覚えもない。

あれ、教室に誰かいたか？

・・・まあとりあえず隠れよう。

そうこう考えてるうちに後ろから何ものかが迫っていた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・なにしてんの？」

長い沈黙の後、担任の一言。

一応説明すると、狭き教師採用試験を潜り抜けた三人中の一人、が声がバリバリオカマ、本人曰くよく間違われるが全然違うようで、

野球部監督、色白ポツチャリめがね、チェックにチノパン。

いくら想像力が貧相なあなたでもイメージできるはず。

・・・ってそんなことはどうでもいいんだ。

ちなみに、俺らが卒業したと同時にどっかの島に飛ばされたけど、
それでもどうでもいいんだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・かくれ・・・・んぼ？」

「あのさぁー・・・・もうすぐ下校時間だからいいところで早く帰ろ
よ。」

いやいやそれだけかよっ！！

わかってんのかわかってないのか帰っちゃったよ、さすがカマなだ
けありますな！

ったくこつちも帰りたいのはやまやまなんだつちゅーに。

「ったく、あいつどこ行っただよ、まじチョー最悪なんだけどー」

おっと、上から女子の声が。

まじチョー最悪なのはこつちなんですけど！

そもそも何で俺がこんなこそこそせにやらん！！

男なら堂々と胸をはって・・・・上履きで帰るべし！！

靴とカバンは取られた、しかし奇跡的にバスの定期券だけは手元に残っている。

事情を知るはずも無い周りのオバサマ達に、

「あらまあ、あの子いじめられてるんじゃないかしら」

と言われても知ったこっちゃ無い！！

もうそんなことどうでもいい、帰りたいんだ！！

カバンの中の弁当箱が明日異臭を放とうが、そんな事は俺を止める理由にならない！！

が、女神は最初から俺に目など向けてなかった。

「ちょっと、あんたいい加減にしなさいよっ！」

目の前に立ちはだかった女子達は、俺を止めるに十分な威圧感を持っていた。

怖えゝつて。

一番前に立ってるのは俺なんかじゃ全く力じゃ歯が立たない、通称番長と呼ばれる女。

「ずっと待ってるんだから早く行ってやんなよつて。」

俺は誰かが待っているという事実を今初めて人から聞かされたんで

すが。

それから誰それとメツチャこっぴどく怒られ・・・

怒らなくても睨み付けてくる方々も結構いたりして・・・

渋々教室へ入らざるを得ないことに。

「・・・よっ！」

俺は空元気にそう言い放った。

そこには、さっきは確認できなかった一人女子。

教室はシクシクという音声で満たされていた。

うわぁー・・・

その女子、小学校卒業間際に、

「俺、実は清瀬恵と付き合ってるんだ」

と親友に告げられた、その人。

彼が私立にいつて会えなくなったから自然消滅でもしたのか？

そして今度は俺か。

いくら清瀬がイベント好きでも・・・なあ。

いやそして泣くことはないだろ！

「本当に心配したんだよ！あんな高いところから飛び降りて・・・本当にびっくりして涙とまん無くなっちゃって・・・」

確かに俺は普通じゃ考えられない逃げ方をしたよ（だってドア誰かが押さえてる気がしたんだもん）。

でも女の子ってそんなことで泣くもんなのかなあ・・・

「・・・でね、小学校の時からずっと気になってました・・・つまらないものですが・・・良かったらこれ貰ってください・・・」

しかも小学校の時からって何かおかしくくないですか？

が、そうは思ってもさすがにこういう状況下で貰わないわけにはいかない・・・よな。

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・わかった」

と、

「ありがとぅ」と言うつもりが、嚙んで無意識にそう発してしまった。

そうさ、俺だって頭真っ白だったわけだ。

考えられない頭は、茶色い小包みを受け取ると、壁に耳を押し当てているであろう皆から逃げる事を優先し、う廊下からではなく外から撤収する方法を導きだした。

カバンと靴はそこあった。

…何が一番大変だったかといえば、その後の対応。

苦痛、その一言に尽きる。

男子に弄られるのはいいとしても、女子はこっちを見てひそひそ話をし、上級生には

「あつ君、あの時追い掛けられてた子だよ（笑）」

と言われる始末。

「そうですけど、何かようですか？」

「いや、別に無いんだけどね、アハハ（笑）」

笑いですね、わかります。

2月14日は一年で最も嫌いな日となった。

まー時期が時期だけに、クラス替えとなる一ヶ月間は俺の心を大きく変えてしまったわけだ。

その後、二度とこんな目に会わないために、今日までまともに女子と話してない。

もちろん清瀬とはそれ以来言葉を交わした事はない。

一言で言えば女子恐怖症。

その日から俺の人生は変わった。

無邪気さが武器な院政少年は死んだ。

表舞台に出る欲は消え、更に積極性も見る影を無くし、そこに存在したのは自分で違和感を感じる空元氣のみ。

そもそもはこんな捻くれてなかった。

誰とでも話せて社交的。

だからリーダー格が勤まったわけで。

そう何がやばいかって、気付いたら友達の作り方を忘れてしまったと（笑）

高校じゃ夏ぐらいいまで孤独極めてたからな。

とりあえず、君も恋沙汰はネチネチせずアツサリしなきゃだめよ。

ただでさえ空気の読めない大学に入ったんだからくれぐれも彼らに毒されないように！（笑）

んー、あれが無かったら今頃プレイボーイになってたんじゃね？（笑）

「…反応が難しいな（笑）」

いや興味深かったよ。意外っちゃ意外だけど山本らしい気もするし。でもそれがトラウマになってるわけね。お前も色々あんだな。

まあ友達としての女子って結構貴重だったりすると思うけどなあ。

別にその相手が東野さんだったわけじゃないんだろ？彼女もさすがに恋愛感情とかは無いべ（それはそれで悲しいかもだが）

全部個人的な意見に過ぎないから怒るなよな。

つまり、リアルに連絡とりたくないってこと？聞かれたら何て言え
ばいい??」

確かに、俺のアドレス帳に女の子は一人もない。

よくご存じで。

「一番問題なのが、その清瀬は東野と仲が良かったりする（笑）彼女
は中学受験組だからしらのだよ、こんなこと。知れたらそれこそ
何言われるかわからんし。」

聞かれたら別に教えてもいいけど、君が無理に教えようとすること
はない。それだけのこと。

あ、会ったたら同窓会に意図的に呼ばなかったんですね？って
聞いたいて」

何この思わせ振り（笑）

「わかった。オレは了解無しで勝手に他人のアドレスを聞いたり教えたりしたことは無いから安心してくれ。中学の話は絶対出さないよ。ホント残念だが、誘導尋問もしない（笑）それでも聞かれたら教えるから覚悟しとけよ。」

ほいじゃ／／

…うそくさいよね。

喋って失敗だったかなあ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7925e/>

二人の優等生

2011年1月25日03時23分発行